

選者として二月に開催した句会の感想（句評）（秦 孝浩の俳句教室（実況）★は特選句

秦 孝浩 選

陽だまりの幸ふつくらと露の臺

千枝里

一読すると写生句のようであるが、中七「幸ふつくらと」には平穩なひと時が垣間見える。さりげない一コマではあるが日常が投影されている心象句である。露の臺はキク科の多年草。ふつくらとしているのは雌の花茎で、雄の花茎は細い。柴田白葉女に「みつけたる夕日の端の露の臺」

青銅の臺の反りや梅真白

逸子

史都鎌倉の宮であろうか。あるいは斑鳩の里の古刹であろうか。雲ひとつない青空に切り込むかのような青銅の臺。そのもとに従うように咲く白梅との対照が実に眩しく見える日であった。水原秋櫻子に「古鏡見る窓前梅のさかりなり」。中村草田男に「勇氣こそ地の塩なれや梅真白」

空を見て雲見て春の遠からじ

訓正

俳句で春とは二十四節氣の立春から立夏の前日までとする。武山のふもとや西海岸であろうか。作者の行動が目に見えるようだ。芭蕉に「おもしろやことしの春も旅の空」。『万葉集』の巻五に「正月（むつき）たち波流（はる）の来たらばかくしこそ梅を招（を）きつつ楽しき終（を）へめ」

甲子園出場めざし入学す

訓正

両親や郷土の期待を一身に背負って入学し「出世」するという価値観は過去のこと。今日では、テニスの大阪なおみ選手や野球の筒香選手のようにスポーツで世界を目指すのも立派な動機。そのような大志を抱いて入学する。甲子園に出場するために進学校が選ばれる時代なのである。高岡すみ子（さいかち）に「靴の紐しつかり結び入学す」

春の昼「コロラドの月」聴く蕎麦屋

富士子

寒紅や「飛鳥川」舞ふ袖袂

富士子

水底に二月の光り雲丹あまた

富士子

一句目も二句目もダンスや踊りの曲。テーマは「ひとり旅」である。一句目はアメリカ民謡。昭和十年代の曲で、入江静夫の訳詞が良い。有原ユリ子（ビクターレコード歌手）が歌っていた戦前の頃の作詞は別の人のもの。（秦孝浩『流行歌総覧』右文書院、六九頁）。景山筍吉に「春昼のセーヌ河畔の古本屋」。二句目の飛鳥川は明日香路を貫いて流れる今は浅くて小さな川。大和川と名を変えて大阪湾にそそぐ。歌謡曲「飛鳥川」を歌っているのは永井裕子。

三句目は三崎市場近くの岸壁の景であると句会の際、補足説明があった。NHK「あまちゃん」で出された雲丹弁当は高級品だが、三崎産はなぜか痩せているらしい。城ヶ島の試験場ではキャベツで育てている。「雲丹」は春の季語だが、ここでは「二月の光り」が主役である。喜多春梢に「雲丹割るや膝を鼎に海女三人」

★薄氷にまだ日を返す力かな

和代

★老梅の時かけ紅をほどきけり

和代

梅東風や延寿の土鈴鳴らし選る

和代

春愁の煮立ちて白む潮汁

和代

一句目と二句目は自己投影が効いており抜群の作。一句目は、薄氷を凝視していなければ完成しなかったであろう。皆川盤水に「薄氷の岸を離れる光かな」。二句目にはほんのりとしたエロスが漂う。橋 かん石に「老梅のつぼみ紅きを羞じらえり」。三句目は「延寿」に意表をつかれた。土鈴の音との距離感が余韻を生む。宋代の禅僧・知覚禅師（九〇四〜九七五）を「永明延寿」という。「梅東風」とは、春の季語「東風」の傍題。森田春峰に「梅東風やさだかに青き潮堤」。

四句目。食べ物は本来「ハレ」（プラス）のものであるが、この作には「ケ」（マイナス）の要素が含まれている。「春愁」の本意をしのぐ巧みな構成にも気づかされた。ものうい哀愁を覚える季節と潮汁とは無関係のようだが、「白む」に屈折感が秘められて一句をなしているのである。西村睦子に「深海の魚と春愁分かち合う」。「白む」とは明るくなるという意味とともに無常、衰弱という暗い意味も挙げられている。（『古語例解辞典』小学館）

【参考、元日に詠まれた『万葉集』の最初と最後の和歌の番号】

初句会の当日、板書し説明を加えた『万葉集』の最後の歌（大伴家持）は四五二六（巻二十）番です。

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

《現代語訳》「新しい年のはじめの、立春の今日を降りしきる雪のように、いっそう重なれ、吉きことよ」。この歌の作者、大伴家持は当時、因幡（現在の鳥取県）の国主（地方長官）という高い地位にありました。

《大伴家持》（七一七〜七八五）父・旅人も官人で歌人。伯母は万葉随一の女性歌人の坂上郎女（さかのうえのいらつめ）。あいつぐ政変に翻弄されつつ、『万葉集』に歌の心をとどめました。

《一番はじめの歌》

籠もよ み籠持ち掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞かな 名告らさね
そらみつ 大和の国はおしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは
告らめ 家をも名をも （巻）一一一 雄略天皇。四二〇〜四八〇？）